

地方における華僑コミュニティの形成と展開 ——熊本県在住華僑の生業と暮らしの民族誌——

The Formation and Development of Chinese Community in Local Cities of Japan: A Study from the Ethnographic Perspective

張 玉 玲

Yuling ZHANG

概 要

本稿は、熊本県在住の福建系（福建省福清県出身）華僑に焦点をあて、関係者へのインタビューや、華僑団体による名簿、および新聞記事などを手掛かりに、移住地である日本の社会的、文化的変容も念頭に置きつつ、地方に居住する華僑の生業、暮らしの変容と華僑コミュニティの再編を明らかにしようとするものである。

その結果、日本各地に分散居住していたがゆえにその実態が明らかにされてこなかった福建系華僑は、日本の社会的変容に適応した形で、個々人の生業、暮らしのみでなく、華僑コミュニティをも再編しつつ展開していった過程をミクロな視点から描き出した。一方、日本人口の大半を占めた農村部の人々の暮らしが江戸時代の延長にあったところから、戦前から戦後にかけて徐々に都市化していったという日本社会の変容を、地方に居住する華僑の生業と暮らしの逆照射として浮かびあがらせた。

I. はじめに一問題の所在

近代日本における華僑の発生には二つの系譜がある。一つは、1850年代日本の開港とともに来日し、横浜、神戸、函館などいわゆる開港場に集中して居住するようになったもので、もう一つは、1899年内地雑居令の発布後に来日し、日本全国に散らばって居住するようになったものである。前者は、貿易や洋服仕立てなど欧米人にかかわりのある業種に従事する上海、広東などの出身者であったのに対し、後者は中華料理、理髪及び行商などいわゆる雑業者であり、福建（福清地域）、浙江（温州）と山東省出身者が主であった。

両者の人数やコミュニティの規模、そして経済力における差異は、そのままそれに関する研究の差異である。つまり、神戸、横浜、長崎、函館などの地域に居住する華僑を対象とした研究はこれ

までかなりの蓄積があるのに対し、その他の地域に関しての研究は進んでいない。例を挙げれば、1899年以降、呉服行商として来日し、日本全国津々浦々に居住するようになった福清出身者が、戦後、戦勝国民としての華僑の福利、權益保障のために各都道府県に設立された華僑總會（華僑聯誼會）の主要メンバーとなり、多くの地域において華僑コミュニティをリードしてきたことは、あまり知られていない史実である。

とはいえ、福清出身者そのものに関する先行研究が全くないわけではなく、彼らの移住とその生業である呉服行商および文化継承についてはこれまで民俗学的、歴史学的分野からアプローチされたものはわずかながらある。たとえば、茅原・森栗（1989）は、長崎、熊本など九州における主に一世華僑による行商の実態を華僑への聞き取りを通して明らかにしようとした¹⁾。許（1989）は日本の労働移民法に関連付けながら、福清出身者の来日と生業の法的根拠を分析したうえ、血縁、地縁紐帯を武器に呉服行商を独占した史実を明らかにした²⁾。曾（1987）は伝統文化である普度勝会の維持と福清出身者のネットワークについて主に神戸華僑を対象に分析しており³⁾、張（2010）は、京都の林一族の族譜、帳簿及び関係者へのインタビューを手掛かりに、福清華僑の移住及び呉服行商の実態について究明しようとした⁴⁾。筆者もこれまで、福清華僑の移住・定住及び文化継承とアイデンティティ形成における血縁、地縁が機能するメカニズムを明らかにしようと、研究を続けてきた⁵⁾。

公の資料が少なく、関係者への聞き取り調査という手法に頼るところは本稿にも通ずるところであるが、上記の研究は、長崎、神戸、函館など明治初期の開港場として多くの華僑を集中的に受け入れた華僑の主な居住地区を対象としており、華僑の非集中居住地域における華僑コミュニティの生成と展開が依然として明確でない。

また、これまでの華僑研究は、もっぱら華僑を政治的、民族的概念の「中国」に関係する何かしらの特性を持つ集団として扱い、彼らの中国の政治、文化との関係性に議論が集中してきた。その一方、移住（国内移動や本国への帰還も含め）、就業及び日々の暮らしなど、個々の華僑の人生における様々な取捨選択や意思決定についての考察は皆無に等しく、華僑コミュニティ内部のダイナミズムが把握されていないうえに、華僑を居住する地区の一員とする視点も欠落してきた。

島村は「在日朝鮮人」を対象として調査を重ねた結果、彼らによる生活文化は、「マジョリティとしての国民文化との関係性を有しながらも、それに完全に同化しているわけではなく、相対的な自立性をもって展開され、かつ日本列島上に確実に根をおろしたもの」と位置づけている。この認識を踏まえて、島村は、日本の民俗学がその研究対象をもっぱら〈日本国民〉〈日本人〉に限定し、

1) 茅原圭子・栗原茂一「福清華僑の日本での呉服行商について」『地理学報』第27号、17-44頁、1989年。

2) 許淑真「日本における福州幫の消長」『撰南学術』B、第7号、59-77頁、1989年。

3) 曾士才「在日華僑と盆行事—移民社会における伝統行事の機能と変容」『民俗学評論』27、40-70頁、1987年。

4) 張国楽『日本における福清呉服行商に関する研究』神戸大学大学院総合人間科学研究科博士論文、2010年。

5) 福建系華僑に関して、筆者はこれまで「在日華僑同乡意識の演变—以福清籍华侨的同乡网络为例」《华人研究国际学报》第六卷第二期、27-52頁、2014年、「在日華僑社会の文化的變動と血縁・地縁紐帯の拡大—神戸在住の福清出身華僑の事例を中心に—」『21世紀東アジア社会学』第7号、84-99頁、2015年、「中国新移民と宗族」『アジア遊学（215）東アジア世界の民俗—変容する社会・生活・文化』勉誠出版、167-181頁、2017年、「移民故乡与文化传承的连续性—在日福清籍华人社会文化变动与同乡同族网络的再建构」《海外华人研究》第二辑、1-21頁、2019年7月、「在日华人的死者供養儀礼与异界观之变容—聚焦于日本神戸『普渡胜会』」《节日研究》第十四辑、山东大学出版社、219-239頁、2019年12月、等の成果を発表してきた。

在日韓国・朝鮮人を含め、それ以外の人々を研究対象から除外してきたその背景には、日本民俗学が国民国家イデオロギーと密接な関係を持っていた経緯があると批判し、多民族主義による民俗研究の必要性を提唱した⁶⁾。

多民族主義の視点は、近年になってから問題化したものではなく、近代日本における国民国家形成の時期、あるいはもっとその前の時代にさかのぼって議論に入れる必要があることを示唆する重要な指摘である。来日の経緯及び定住の過程などは異なるものの、同様の批判と反省は、在日華僑を対象とするこれまでの研究にも当てはめることができる。

華僑に関するこれまでの先行研究と島村の在日コリアンについての研究への指摘を踏まえ、筆者は地方における華僑の民族誌的研究の試みとして、日中戦争下、日本全国の農村地区を回っていた華僑の生業と暮らしについて、身分証明書など彼らが実際に使っていた公的資料と個々のライフヒストリーを通じて考察した⁷⁾。本稿では、熊本県在住の福建系華僑⁸⁾に焦点をあて、華僑へのインタビューや旅日福建同郷懇親会などの華僑団体が作成した名簿を手掛かりに、各家族誌を整理する。そのうえで、母国中国のみでなく移住地である日本の社会的、文化的変容も念頭に置きつつ、①地方に居住する個々人としての華僑の生業と暮らしの実態、②戦時中及び戦後の混乱期における華僑コミュニティの再編を明らかにする。

以下、日本全国に分布するようになった福建系華僑の先駆者のうち、長崎と福岡の張一族の移住・定住を概観したうえで、熊本の葉一族と林一族の家族誌を整理しつつ、日本の社会的変容に適応した形で、個々人の華僑の生業と暮らし、ないし華僑コミュニティが形成し展開していく過程を考察する。

Ⅱ. 来日福清人の先駆者

Ⅱ-1. 内地雑居令以前の福建系華僑

のちに全国的に分布するようになった福建系華僑は、1899年「内地雑居令」とその施行細則「勅令第352号」⁹⁾の発布を機に来日した。以来、先に来日し、生活基盤を築いた華僑が同郷、同族をさらに呼び寄せる形で、その規模と範囲を日本各地に拡大した。こうした福建系華僑の受け皿となったのは、主として1899年以前に開港場である長崎に渡り、比較的経済力があつた福建出身の貿易商であつた。現時点の資料で確認できたのは、遅くとも明治初期には来日していたと思われる福清県塘北村出身で、貿易会社「益隆号」の行主（経営者）張恒坤とその兄弟で「盛隆号」の行主張恒坦である¹⁰⁾。この二人を頼りに、恒坤のほかの兄弟や同郷・同族が来日しそれぞれ商売を展開し

6) 島村恭則『『在日朝鮮人』の民俗誌』、『国立民俗学博物館研究報告』91、(763-790頁)763頁、2001年

7) 張玉玲「日中戦争下の華僑の暮らし—ライフヒストリーとドキュメントから見た『生活者』としての華僑像」、『アカデミア』人文・自然科学編第20号、73-97頁、2020年。

8) 本稿で取り上げる福建系華僑とは、福建省北部の福州、特に福清県の出身者で、1899年以降来日し、日本各地で行商や理髪、中華料理などの雑業者である。一方、福建省南部（アモイ）の出身者は、貿易商に従事する者が多く、長崎、神戸と横浜などの港町に集中している。

9) 詳細は、許淑真「日本における労働移民禁止法の成立：勅令第352号をめぐって」松高孝一編『布目潮風博士古稀記念論集 東アジアの法と社会』古書院、553-580頁、1990年、に詳しい。

10) 布目潮風「明治十一年長崎華僑試論—清民人名戸籍簿を中心として—」山田信夫編『日本華僑と文化摩擦』厳南

ていった。そして、その中の成功者は「益隆号」同様さらに多くの同郷・同族が来日した際の受け皿となった¹¹⁾。

こうした急増した福清出身移民に対応するために、同郷団体「三山公所」が1899年に設立され、初期の福建系華僑が頼れる唯一の「公的機関」の役割を果たしていた。また、三山公所が年に一度崇福寺で開催する伝統行事「普度」¹²⁾は、京都と神戸でも普度が行われるようになる1930年代までの間、日本各地から福建系華僑が集まり、親睦を深め、情報を交換する重要な場であった。これもまた、日本各地に分散居住している福建系華僑が長崎に特別な感情を持つ主な理由の一つである。

実際、福建系華僑のみでなく、在日華僑社会全体にとっても、長崎は歴史上重要な役割を果たしてきた。長崎についての研究が多く蓄積されてきた所以でもある。長崎と華僑についての議論は別稿に譲ることとして、以下では、地方における福建系華僑の展開を具体的にみていく。

II-2. 博多福新樓の張一族

1899年以前に長崎に渡り、のちに長崎以外の地に移住し、さらにほかの華僑の受け皿となった事例の一つとして福岡の張一族を見てみる。

II-2-1. 加枝の来日と創業

博多にある老舗中華料理店福新樓の創業者、張加枝は前述の張恒坤の甥にあたり、1889年（明治22年）に福清県塘北村より来日した。長崎で倉庫番、貿易事務、料理店の出前持ちなどを経験したのち、1899年内地雜居令の発布後、熊本、佐賀などを回り呉服を行商していた。経済的基盤が出来上がると、博多に居を構えた。

1902年に加枝は長崎出身の日本人女性と結婚、1903年には長男兆順が誕生し、さらに4男1女の子をもうけた。1904年に、福岡で最初の中華料理店（通称小鳥屋）をのちの玉屋裏付近で開店した。メニューにはちゃんぽん、皿うどんがあり、材料として長崎から取り寄せた上等な唐灰汁、モヤシ、キャベツを使用した本格な中華料理であった。しかし、当時の客といえ、出されたバナナを皮ごと食べるといった具合で未だ外来の食文化に馴染んでおらず、間もなく閉店した。その後、日本のシャツ、洋傘、毛織物などを中国へ、中国から唐チリメン、緞子、シユスなどを日本へと貿易に専念したが、日本工業の発達と外国列強の中国市場の独占により小資本の加枝の貿易は行き詰まり、1909年に、東中洲電車道沿いに再び中華料理福海樓を開店した¹³⁾。ツバメの巣のスープ、鱻のひれの煮込み、ナマコと鶏のうま煮、鶏の丸蒸しスープなどを提供する、やはり高級料理店のスタンス

堂書店、196-197頁、1983年。来崎した福清出身者の中、身分が「上等」と区分されたのは「経営者」であるこの二人のみで、その他の雑業者は「下等」と区分されていた。

11) 陳優継『ちゃんぽんと長崎華僑—美味しい日中文化交流史』2009年、24頁。

12) 崇福寺は、1629年に創設された福州系華僑の菩提寺であり、三江幫の興福寺（1623年）、泉系華僑による福濟寺（1628年）、広東幫華僑による聖福寺（1677年）と並んで、唐四箇寺と呼ばれている。1654年に福州府福清県黄檗山万福寺住職隱元禪師が長崎に招かれて以来、唐四箇寺では、黄檗宗の儀軌に沿って普度などの儀礼が行われるようになった。普度とは、中国民間で受け継がれてきた仏教、道教などの要素を持ち合わせた靈魂供養の一つであり、日本の華僑社会では、20世紀に入ってから福清出身者によって担われてきた（詳細は拙稿「在日華人的死者供養儀礼与昇界觀之変容—聚焦于日本神戸『普渡胜会』」《节日研究》第十四輯、山东大学出版社、2019年12月をご参照されたい）。

13) 『夕刊フクニチ』1955年1月16日付。



写真 1. 昭和 15 年頃の福新楼。(張光陽氏ご提供)

であったが、県庁の役人の中で評判となり、徐々に客が増えた。第一次世界大戦開始後、中洲にドイツ人捕虜収容所ができ¹⁴⁾、差し入れとして出された福海楼のちゃんぽんなどは、青島での滞在経験者が多いドイツ人にも評判だった¹⁵⁾。

1921 年に、福海楼は福新楼に改名した¹⁶⁾。第二次世界大戦の開戦、日中戦争の勃発により、食材の調達が徐々に困難となり、全店休業となった。当時、福岡に 20 人ほどいた中国人が、助け合いながら生計を維持していた。1944 年、福新楼も強制疎開させられ、建物が解体された。

終戦後の 1948 年、東中洲仲之町で福新楼が再開し、中華料理のほか、進駐軍を相手に「ピフテキハウス」もオープンした。1951 年、本格的中華料理店としてスタート。長男の兆順は県下の料理学校で講師を務めるほか、テレビ出演などを通じ中華料理の普及に努めた。店舗は幾度か遷移したが、1968 年天神に四階建てのビルが建ち、1989 年と 1992 年に、それぞれ「中国厨房新界」と「チャイナ・カフェ」をオープンし、より多様なニーズに対応するサービスを始めた¹⁷⁾。

II-2-2. 先駆者として

日清戦争後に、弁髪姿で来日した加枝は、当時中国蔑視の風潮が高まる中、冷やかされながら、強い忍耐力と低い物腰で周囲の信頼を得、福岡で地盤を築いた。1899 年以降、多くの福清人は長崎を経由して日本各地に渡っていったが、福岡にも大正期から多くの中国人が移住してきた。加枝

14) 1914～1918 年、日本は日英同盟を根拠とし、ドイツに宣戦布告し、ドイツ領である青島及び南洋群島を占領した結果、およそ 5000 人のドイツ、オーストリア・ハンガリーの将兵が捕虜とあり、日本各地の収容所に収容された。

15) 『キンシャイ中洲』58-60 頁、出版社、発行年不明。

16) 中国料理福新楼 HP、2021 年 3 月 24 日閲覧。

17) 中国料理福新楼 HP、2019 年 8 月 18 日に行われる張光陽氏へのインタビューによる。

は、自分が福岡で築いてきたあらゆるネットワークを生かし、同胞の商売に必要な資本金や土地の斡旋など、様々な面で面倒を見ていた。加枝が亡くなった1955年1月時点で、福岡県華商會所属の中国人は1800名ほどおり、その中で中華料理店は福岡市内だけでも32店舗あった。

福岡名物となった博多皿うどんは、福新楼で誕生したとされており、福建炒麵をもとに昭和初期に客に提供したのが最初で、現在もその調理法や味は変わらないという。また、当時の福岡では中華材料となる多くの野菜は長崎から調達されたため、加枝は出入りの八百屋にモヤシの作り方を教え、そこから店に納めてもらうようになった。のちに、中華料理の普及とともにモヤシも一般的に使用されるようになったという¹⁸⁾。

何より、福新楼のように、初期に開業し、経済的に安定した中国人たちによる中華料理店や会社は、多くの福清同郷や中国人が来日する際の身元保証人、一時的滞留先そして就業先となり、日本各地方における華僑コミュニティの形成・拡大に欠かせない存在となった。

次章では、熊本に定着した福建系華僑の二家族に焦点を当て、初期の福建系華僑の代表的生業である中華料理と呉服行商の展開を、家族誌及び地方の社会史と結び付けながら見ていく。

Ⅲ. 熊本県における華僑コミュニティ

Ⅲ-1. 葉一族の熊本への定住・移住

この章では、熊本の老舗の一つ、「紅蘭亭」を創業した葉一族を取り上げる。紅蘭亭は、福清出身華僑二世である葉菊華が1934年に熊本で創業した中華料理店で、現在、菊華の長男である葉山祥泰（1934年生）とその息子の耕司が経営している。以下、菊華の父葉修儀の来日から見ていこう¹⁹⁾。

Ⅲ-1-1. 修儀の来日

福清県西葉村から早い時期に多くのものが来日し、行商を営んでいた。葉修儀は1900年ごろに長崎に上陸し、のちに熊本などで行商をしていた。途中から同郷人の紹介で大阪に行き、工事現場の労働者たちの食事の世話をしていた。1914年、長男菊華（綸書）が大阪で生まれた。

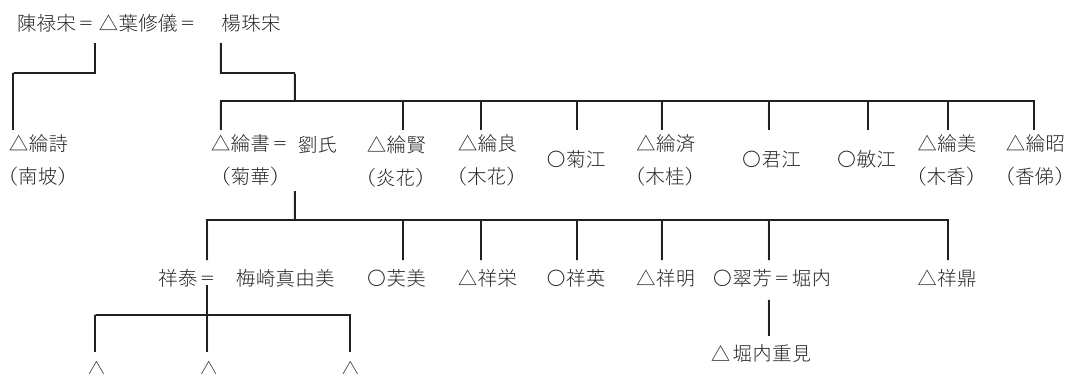
祥泰が持っている葉氏族譜（修儀の世代以降の部分のみ）によれば、修儀は肇公の次男として1879年に生まれた。官廳村の陳祿宋（1885年生）と結婚し、1911年に長男綸詩（南坡）が生まれたが、祿宋は翌年死亡した。のちに、牛頭村の楊珠宋（珠妹とも）と再婚した²⁰⁾。1914年、二人の間に綸書、すなわち菊華（菊花）が生まれた。菊華以外に、綸賢（炎花、1916年生）、綸良（木花、1916年生）、

18) 『夕刊フクニチ』1955年1月16日付。

19) 葉一族に関する情報は、葉山祥泰（1934年生まれ、2019年4月16日に熊本紅蘭亭および祥泰自宅で実施）とその弟である葉山祥鼎（1944年生まれ、2019年2月17日に熊本阿蘇葉祥明美術館にて実施）、葉祥明（1946年生）へのインタビュー（2019年4月22日に田園調布にて実施）及び福建同郷會名簿などの資料に基づいて整理されたものである。

20) ちなみに、玉宋の連れ子陳書成（1910年生、珠宋と前夫陳明樂（赤礁村出身）の子）は、のちに葉華振の長女芳宋と結婚したが、その次女月宋が、葉南坡の息子祥茂と結婚した。結婚相手を福清出身者にこだわらず、かつ同姓不婚という伝統的慣習を守る必要から、もともと小さな在日福清人コミュニティは、母系社会に近い構造になっていた。

表 1. 熊本県葉家の関係図



西葉村葉氏族譜（の一部）（葉山祥泰氏ご提供）に基づき、筆者作成。本文で言及された人物の関係（輩份）を理解するためのものであり、一族のすべての構成員を反映させているものではない。

綸濟（木桂，1922年生），綸美（木香，1929年生），綸昭（香佛，1931年生）の5男と，菊江，君江，敏江の3女，計9人の兄弟であった。その中で，炎花と木花は1916年生まれの双子兄弟で，頭がよく成績優秀だった。熊本の進学校済々黌を卒業した後，中国語を学ぶために長崎の時中小学校に通っていた。しかし，地元の日本人青年との諍いの中で，木花は死亡した。当時，木花が刺されたときの血まみれの学生服は，福建省厦门市ある華僑博物館に展示されている。生き残った炎花は戦前，上海で汪兆銘政権の財政部門の一員として務めていた。

話は修儀に戻る。修儀はのちに大阪から再び九州に戻り，熊本に居を構えながら，熊本や阿蘇などをリヤカーを引いて緞子を中心とした呉服の行商していた。得意先は，温泉旅館や市役所，寺院など比較的に裕福なところが多かった。現在葉家が檀家となっている曹洞宗の僧侶も，父が当時修儀からよく反物を買っていたと話している。お盆と歳の暮れの時に修儀は集金に行っていたが，読み書きが儘ならず，帳簿の記帳は客に依頼することもあったという。

Ⅲ-1-2. 菊華と紅蘭亭の開業

修儀の長男菊華は，18，19歳の頃，商売のために上海と日本の間を行ったり来たりしていた²¹⁾。20歳の頃，熊本に帰ってきて長崎生まれの華僑女性劉氏と結婚し，1934年に長男祥泰の誕生をきっかけに，熊本の花畑町で中華料理紅蘭亭を開業した。当時熊本市内の中華料理店は，華僑経営の会楽園と中華園（ともに1933年創業）と日本人の開業・経営とみられる東洋軒²²⁾のみだった。開業に先立って，菊華は福岡の那珂川岸にある会楽園で数か月の間修行をした。会楽園の経営者は同じ村の葉坤林で，よく面倒を見てくれた。菊華は一日も早く独立できるよう，一生懸命料理を覚えようとした。「料理を運ぶときに，親指をわざと皿に突っ込んで味を覚えた。夜，みんなが寝た後も，

21) 2019年4月22日，葉祥明氏へのインタビューによる。ちなみに，太平洋戦争以降日本政府による統制経済のもと，人々の生活が一層困窮となり，ビジネスチャンスを見つけるべく上海に渡った華僑は大勢いたことは，ほかの華僑へのインタビューにおいても確認された。

22) 大正15年に上通にタイガー食堂という名前で開業。のちに東洋軒と改名し，昭和初期，銀杏通，花畑町へと移転し，中華料理と西洋料理をメニューに出していた。1989年閉店。

こっそりと料理を作っては那珂川に捨てていた」²³⁾ という。

開業後の紅蘭亭は、多くの文人や学生でにぎわい大繁盛した。戦時中でも、空襲が激しくなる1944年までは、紅蘭亭は特に大きな影響を受けずに営業できた。ただその一方、日中戦争の戦火が拡大すると、当時まだ20代前半であったにもかかわらず、菊華は熊本の中国人をまとめ、監視・管理する目的で作られた華僑親和会の会長への就任を命じられた。日本語が堪能であったため、菊華は警察に体よく利用されたのであろう。当時熊本にいた中国人は一世がほとんどで、リヤカーを引いて簡単な日本語を使って行商をしていたが、読み書きのできる人がいなかったのである。

日本の対外侵略戦争の重要な基地として、熊本の市内に多数の中小工場がある以外、陸軍の航空教育隊が置かれた菊池飛行場、本土決戦作戦基地としての健軍飛行場および1944年1月にその近くに設立された三菱重工業熊本航空機製作所などがあり、1944年11月21日に初めて米軍機による爆撃を受けたあと、1945年3月以降、熊本県各地で空襲に見舞われた。7月1日、呉、下関、宇部への攻撃とともに行なわれた熊本大空襲は、最大規模のものであり、市街の大部分が焼失した。8月10日にも同規模の空襲を受け、熊本市街は焦土と化した。

度重なる空襲が続く中、葉一族はリスク分散の方法を採った。つまり大家族を「去る組」と「残る組」と半々に分けて戦禍を凌ぐものだった²⁴⁾。1939年、修儀の妻珠妹は幼い子どもを数人連れて、朝鮮経由で上海に行った。一方で、長男菊華一家は熊本に居残った。当時祥泰は5歳で、別れ際に祖母と撮った記念写真はいまだに持っている。1944年、空襲が始まった後、一家はさらに二分して疎開した。紅蘭亭は、空襲で焼けた。

Ⅲ-1-3. 戦後紅蘭亭の再開と進駐軍

戦後、海外からの軍人の復員と一般日本人の引き揚げが始まり、熊本県にも、19万人を超える引揚者が流入した。一方、1945年10月5日に、アメリカ第2海兵師団第8戦闘連隊主力凡そ400人が熊本に進駐を開始した。駐屯地は、旧熊本陸軍幼年学校（現陸上自衛隊第8師団）にあった²⁵⁾。

戦後、熊本市北署の署長から依頼され、紅蘭亭は市内に流れ込んだ人々のための食堂として、上通にある土地を紹介してもらい、いち早く再開した。当時、トラックごとにカボチャが運ばれてきて、それを主材料にした料理、チャプスイが主だった。チャプスイとは、広東料理によく出されている、野菜と肉または海鮮の炒め物であり、日本では馴染みのない言い方であったが、深刻な食糧不足のなか、チャプスイも飛ぶように売っていたという。

こうして、戦後の熊本における大規模な人的流入を背景に、紅蘭亭は戦禍から復活することができたのである。

Ⅲ-1-4. 祥泰が家業を継ぐ

高校を卒業した祥泰が、慶応義塾に入学し、経済学を専攻した。大学卒業後、MBA取得のため一年間アメリカに留学に行ったが、日本における在留資格更新のため、1958年1月に日本に戻った。

23) 2019年4月16日に行われた葉山祥泰氏へのインタビューによる。

24) 当時の華僑は、子どもが10人近くいるという大家族が多く、移動しやすさと旅費などの理由もあって、家族の一部が帰国し、一部が日本に残るケースはかなりあった。

25) 1956年10月に日本に返還された。

祥泰の帰国に先立って、1957年11月に、紅蘭亭下通店がオープンした。当時、菊華は上通にあった紅蘭亭の店舗を、火災に遭って困っていた同郷の林康治（後述のニコニコ堂創業者）に貸していた。帰国した祥泰に、菊華は会社の印鑑や通帳などを渡し、店の経営から退き、熊本華僑総会の会長など華僑社会で活動をつづけた。

店を継いだ祥泰は、アメリカなどで受けた刺激をビジネスに生かそうとした。1962年に、熊本初の洋菓子店スイス（Swiss）を開店した。それ以降も、定期的に海外に行き、飲食店をはじめ商売のヒントを探り続けた。現在、葉一族経営の店には、上通と下通にある紅蘭亭の二店舗の中華料理レストランと洋菓子店のスイス、そして、ジャンジャンゴー²⁶⁾という中華居酒屋がある。そのいずれも地元で評判の高い老舗となっている。その中で、開店当初からメニューにあったとされる「太平燕」^{タイピンイェン}は今やすっかり熊本名物として知られ、度々テレビなどのマスメディアにも登場する。

Ⅲ-1-5. 熊本名物の「太平燕」

太平燕とは、肉、海鮮と野菜が入っている春雨スープに揚げた卵がトッピングされるもので、カロリーが低くあっさりしているのが特徴である。1990年代から熊本の小学校の給食としても提供されるようになるほど、地元の人々に馴染みの深い食べ物である。2004年3月、新幹線の開通とともに流入してくる観光客を誘致するために、熊本県が新幹線「つばめ」の名にひっかけて、郷土の名物料理として「太平燕」を積極的に売り出して²⁷⁾以来、全国に知れ渡るようになった。また、ほぼ同じ時期から、メディアなどでは、太平燕の紹介の一環として、その「ルーツ探し」や「元祖」²⁸⁾の「確定」などがたびたび行われており、その都度、華僑の故郷である福建省で食される「太平燕」と比較されるが、その中身がワンタンのような「肉燕」をアヒルの卵（鴨卵）と一緒にゆでたスープ入りの料理であり、熊本の太平燕とは似て非なることから、熊本の太平燕は現地生まれと結論付けられていることが多い。

実際、紅蘭亭のホームページに特設された「太平燕」の項目に記されているように、熊本の太平燕の元は、長崎などの普度勝会でも参拝者に振舞われる炊出しの一つ、汁米粉である可能性が高い²⁹⁾。また、筆者がフィールドワークで訪れる福清地域では、米粉以外にも、麺類や春雨のようなイモ類のデンプンを材料とする糸状の食材を用いて、野菜、海鮮と一緒に炒めたり、スープにした料理がよく食卓に並んでいる。つまり、九州に渡った初期の華僑が、日常的に食していたこうした故郷の味をもとに、様々なアレンジを加えた結果、太平燕のような「現地生まれ」の中華料理が現れたのだと考えられる。これは、長崎では四海楼のちゃんぽん、福岡では福新楼の皿うどんも同様に、様々な文脈で語ることができるが、ここで重要なのは、華僑が移住地の様々な需要と制約の中で、自ら持っている情報や技能などを最大限に生かしてきた結果、「新たに生まれた」料理が地域社会の一部と化していったということを、熊本名物の「太平燕」が象徴的に表していることであろう。

26) 「正正好」と書いて、ジャンジャンゴーと発音、「ちょうどよい」という福清方言である。

27) 『朝日新聞』、夕刊、2004年2月7日付（聞蔵Ⅱビジュアル）。それに先立って、熊本を全国にアピールする名物として、2001年12月に太平燕を紹介するホームページが地元の有志によって作られ（『朝日新聞』、朝刊、2002年8月17日付、聞蔵Ⅱビジュアル）2003年7月に「太平燕の会」が設立された（『朝日新聞』、朝刊、2003年7月12日付、聞蔵Ⅱビジュアル）のも、新幹線の開通に関連する動きとして捉えられる。

28) 現在太平燕の「元祖」、「本家」として語られているのは、熊本の中華料理の老舗とされる中華園（創業者趙慶餘氏）、会楽園（創業者薛氏）と紅蘭亭である。

29) 紅蘭亭公式HP、2021年3月22日閲覧。

Ⅲ-1-6. 「中国」への関心

祥泰は1960年に結婚した。日中国交が回復した1972年に、祥泰は「居住地にもっと役に立ってほしい」という海外華僑に向けた周恩来の呼びかけに応じ、兄弟たちとともに日本国籍を取得し、それに伴い、名字を「葉山」に変えた。

父菊華は1963年に亡くなり、熊本に墓を作った。長崎で行なわれる普度に毎年家族で参加するし、旅日福建同郷懇親会³⁰⁾の年度大会にもよく参加する。祥泰は、ほかの兄弟同様、小さい頃から日本の教育を受け、中国の故郷に一度も出向いたことはなかったが、陳舜臣や吉川幸次郎などの中国文学者による作品を通じて、中国や中国文化に興味を持つようになった。

祥泰は第一線から退いた後、特に中国の漢詩や書道に没頭しているが、時間を見つけては、一族の歴史をイマジネーションを交えながら英語で綴っている。華僑五世となり、ますますルーツである中国に縁が薄くなる孫たちに、一族が中国から渡ってきた歴史を知らせる義務感を強く感じているという。

明治以降、あらゆる分野で加速化した日本の近代化は、日本社会全体を大きく変化させていった。こうした変容していく日本社会の一端はそこに生活の拠点を置き、欧米文明を受容しつつ日本社会に溶け込んでいった葉一族からも、垣間見ることができる³¹⁾。

Ⅲ-2. 林一族の熊本への移住・定住

熊本に定着したもう一つの家族、林一族は、日本海側で呉服行商を行ったのち、親族を頼って熊本に移ってきた。林一族を通して、戦前の福清出身者が主に従事した職業である呉服行商の実態とともにその後の展開を見てみる³²⁾。

Ⅲ-2-1. 林其湊兄弟の来日

林一族の歴史は、林其湊兄弟の来日から始まった。其湊は、1898年に高山市赤礁村に生まれた。6男2女（族譜では1女）計8人兄弟のうち、其湊は男兄弟の中で4番目である。兄弟の中で一番早く来日したのは、3兄其阜である。其阜は1910年代にほかの同郷人とともに来日し、鳥取県で数年間行商をしていた。商売が落ち着くと、ほかの男兄弟5人全員を日本に呼び寄せて一緒に行商をしていた。

其湊は、数年間行商をし、ある程度貯蓄できたと思われる1923年に帰国、西葉村出身の葉玉宋と結婚した。当時、其湊は25歳で、玉宋は16歳だった。翌年、其湊は一人で再び馬尾港から出発し、上海経由で神戸に上陸した。1925年に玉宋を呼び寄せて、鳥取県の境港で暮らしはじめた。其湊

30) 日本各地に分散居住する福建出身者の親睦を深め、子女の民族教育、結婚、文化（普度）継承などの問題を共有・解決すべく、1961年に設立された全国規模の同郷団体である。設立以来、各地の同郷会が持ち回りで年度大会を開催してきた。（张玉玲，2014年，前掲論文，42-46頁）

31) 葉祥明の生い立ちと画家としての世界観について論じた拙稿「美をもって醜を制す—画家葉祥明のコスモロジー」（『民族藝術学会誌 arts/』VOL. 37, 2021年3月）で明らかになった葉祥明の考えは、華僑が「華僑」の概念を実に多様にとらえていることを示している。

32) 林一族については、林康治氏（1930年生）へのインタビュー（2019年2月16～17日）およびその自伝『報恩感謝』（熊本日々新聞，1996年），林継発氏（1936年生，2019年8月22日に熊本ご自宅でのインタビュー），林祥増（1963年生，2019年2月16～17日に熊本市内でインタビュー），黄光子氏（1941年生，2019年5月14日に北九州市にてインタビュー），林友健氏（1975年生，2019年6月22日に電話による）へのインタビューに基づいている。

は鳥取県の周辺、時には、船で隠岐まで行商に行っていたという。1928年に長女艶宋、1930年に次男康治³³⁾が生まれた。

1931年、九・一八事変が勃発したあと、兄弟たちは続々と帰国した³⁴⁾。帰国するための旅費が足りず、やむを得ず日本に残った其湊一家は、1932年ごろ、妻玉宋の弟修億³⁵⁾を頼って、熊本市に移った。最初は水前寺公園近くの二階建ての一軒家で同郷の葉高源さん、葉修億さんなどの四家族で共同生活をしていたが、後にJR豊肥線のガード下、更に上職人町（新町の一部）へと転居し、家族7人で四畳半一間で暮らしていた³⁶⁾。

熊本に移ったあと、其湊は熊本にあるいくつかの間屋から反物を借りて、それを担いで、上益城郡益城町から御船町の山間部まで歩いて、点在する集落を一つずつ回り行商していた。結婚式用の女性の着物の生地も調達していた。お金がある程度たまると、其湊は自転車を購入し、自転車に反物を積んで売りに行った。長男康治は高等小学校を出ると、新市街のレストランや中華料理店で働き始めたが、空襲で焼けた後、風呂敷に包んだ反物や生地を自転車に積んで其湊と一緒に行商に出かけた。其湊は「正直に義理堅く生きた人で」、郡部の人々から親切にされていた³⁷⁾という。

Ⅲ-2-2. 戦禍を凌ぐ

戦時下の大家族の生計は楽なものではなかった。長女艶宋は小学校の卒業と同時に日給60銭で近くのお菓子屋さんで働き始めた。時折、幼い弟継発を傷痕軍人のいる病院に連れて行って、軍人から金平糖や乾パンをもらっては、市場までもっていき、売ったという。太平洋戦争が始まったあと、人びとの生活に益々厳しい規制がかかるようになると、艶宋と康治は、農家から食料品を集めて市場で売って生計を立てていた。継発の記憶では、兄康治が農家に行き、集めてきた小豆や卵などを竹籠に（五センチほど敷かれる小豆の上に卵を載せ、その上からさらに小豆を敷く形で）交互に積んで、艶宋がそれを担いで市内へもって売っていた。幼い継発もよくそばで姉と兄の手伝いをしていた。道中、農家の人がかわいがってくれて、芋や水などをくれたことは、幼かった継発の記憶に深く刻まれている³⁸⁾。

1944年11月、アメリカ軍による空襲が始まり、リスク分散のため、一家は二か所に分かれて暮らすことになった。艶宋、康治と父其湊は蔚山町で暮らしていたが、継発を含め幼い兄弟たちは、母と上益城郡で一軒の農家を借りて仮住居とした。兄弟たちが茶碗など家財道具を担いで、三時間ごとに休んでは歩いて、15時間かけて引っ越したという。継発は上益城郡の小学校に転校し、終戦まで通っていた。

Ⅲ-2-3. 新たな商機を捕まえる二世の戦後

終戦を迎えた華僑たちは新たな商機に恵まれた。15歳となった長男康治は、戦後、「何でもしたが、

33) 長男は康治が生まれる前に夭折した。

34) 1924年に、三兄其阜は日本で病死し、その妻は当時3歳の息子連れて再婚。1937年ごろ、16歳になった息子がだけが故郷赤礁に帰り、「認祖」（林一族の一員として認められること）した。2019年6月22日、林友健氏への電話インタビューによる。「息子」は、林友健氏の祖父である。

35) 葉修億、1924年に父と兄を頼って来日し、熊本一帯で行商を始めた。葉修億氏の手記による。

36) 林康治、前掲書、11頁。

37) 林康治、前掲書、18-20頁。

38) この部分の内容は、2019年8月22日に行われた林継発氏へのインタビューに基づいて整理したものである。

一番儲かったのはヤミ商品の運び屋」であり、当時統制品だった小豆、メリケン粉、たばこなどを数名の華僑とともに電車で20時間をかけて神戸三宮の高架下まで運んでいき、売った後に鍋や自転車、タイヤ、キャラコなどを仕入れて熊本に持ち帰って販売した。一回の往復で1700円の儲けがあった（当時、食堂の調理師見習いの時の給料は43円だった）という³⁹⁾。ただ、康治が病気のため、三回で運び屋を辞めた。

一方、父其湊や艶宋姉たちは、行商時代のネットワークを生かし、熊本市上通で繊維の販売会社「祐豊公司」を開いた。病気が快復した康治もそこで商売を手伝うようになったが、しばらくして家出した。小学校時代の同級生でもあり同じく福清出身者の葉倫康が働く東京の中華料理店、のちに姉艶宋が嫁いだ長崎の鄭家が経営する中華料理店で働いたあと、再び熊本に戻って、父から援助された10万円を資本金に、独立して商売をすることになった。1952年のことであった。

康治は、早速熊本長六橋際の国際市場で一坪ほどの店を借りて、卸店「林康治商店」を開き、大阪の間屋で安く仕入れてきたセーターを扱った。仕入れ価格も卸価格も安く設定したため、店はたちまち評判となり、開店二年目から国際市場の130店舗もあった衣料品問屋の中でトップの売り上げを記録した。その取引先は「南九州一円に百十数軒もあつて、店の規模はのちに10坪ほどに拡大した。しばらくして、康治の妹も国際市場内で洋服屋「ひつじ屋」を開店した⁴⁰⁾。この国際市場は、交通の便が良く、人の動きが盛んであったことから戦前から長六の闇市として栄えていたところで、1950年代は約300軒の店舗を抱えていた。1951年頃「糸偏景気」で全国的に繊維製品の需要が高まるなか、国際市場も繊維関係の店舗が増加した⁴¹⁾が、康治の商売はこの波にうまく乗ったものと思われる。

1958年3月4日に起きた「長六の大火」といわれる火災で、二つの店とも焼失し、半分以上の商品が焼けた⁴²⁾。康治は、焼け跡の近くで民家を借りて商売をしたのち、1960年に、弟の継発とともに、同郷の葉菊華が経営する紅蘭亭の上通店の一部をかりて衣料小売り専門店「ニコニコ堂」を開業させ、セルフサービスという新しいビジネススタイルを始めた。

Ⅲ-2-4. ニコニコ堂と新たな物流システム

新たなスタイルの小売りを始めた理由は、当時上通の商店街にはすでに数軒の衣料品の問屋があり、そのライバルになることを避けることと、長年の商売経験から、地方問屋の将来性に不安を抱いたこと⁴³⁾だという。昭和30年代、ダイエーやニチイ、ジャスコなど関東や関西などの都市部では「スーパーマーケット」というアメリカ型のセルフサービスの物流システムが始まっており、康

39) 林康治、前掲書。ちなみに、艶宋と康治が農産物を売りに行ったのも、康治が神戸から運んだ品物を販売したのもこれらの闇市だと思われる。島村によれば、戦時統制下及び終戦直後の熊本市にも、いくつかの闇市が存在しており、農村部から担ぎ屋が持ち込む食料品や旧軍から持ち出された貯蔵物資や米軍からの横流し品など、様々なルートで入手された物資が販売されていた。戦後の闇市では、居住の在日コリアン、華僑以外でも、引揚日本人や沖縄出身者などがいた。後述の国際市場も、その中の長六の闇市を基に発展したものである。島村恭則「熊本・河原町「国際繊維街」の社会史—闇市から問屋街、そしてアートの街へ—」、『関西学院大学 先端社会研究所紀要』第9号、2013年、22頁。

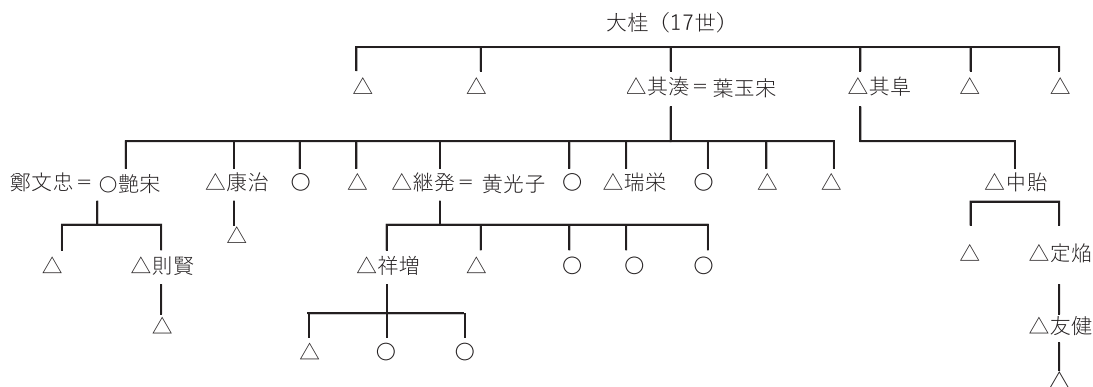
40) 林康治、前掲書、36頁。

41) 島村恭則、2013年、前掲論文、22頁。

42) 火災後国際市場は再建され、繊維問屋に特化した国際繊維街に変わった。島村恭則、2013年、前掲論文、26頁。

43) 林康治、前掲書、41頁。

表 2. 熊本県林家の関係図



瓊田赤礁林氏族譜家譜世系図（林祥増氏ご提供）に基づき、筆者作成。本文で言及された人物の関係（輩份）を理解するためのものであり、一族の構成員をすべて反映させているものではない。

治兄弟はニチイなどで勉強し、セルフサービスの要領を覚えたのち、「熊本初の衣料品のセルフサービス」をニコニコ堂のセールスポイントとして打ち出した。康治は商品の仕入れを担当し大阪や岐阜まで回っていたが、継発は妻とともに店舗の経営に当たっていた。のちに、艶宋の夫で長崎華僑の鄭文忠や三弟の瑞栄とその同級生も経営に加わり、ニコニコ堂は当初から、家族経営の色彩が強かった。

ニコニコ堂一号店（上通店）は、熊本初のセルフサービスという新たな流通業態に加え、飛行機でのチラシ配布、クイズ懸賞などアイデアに富んだ経営スタイルが功を奏し、「深夜営業、夜中の仕入れ。時には銀行にも深夜の集金を頼んだ」ほど、オープン当初からその業績を「コイが滝を上るような勢いで」伸ばしていった⁴⁴⁾。昭和43年あたりに、神戸のダイエーに見倣って熊本市健軍で二号店を開店⁴⁵⁾し、新たに食品の取り扱いもはじめた。1970年に新町店、1975年にニコニコ堂楠店と、日本の高度成長の波に乗って、佐賀県鳥栖、長崎県大村、福岡県二日市など熊本県以外の九州地域で50店舗をチェーン展開する上場企業にまで発展した⁴⁶⁾。

問屋からスーパーマーケットへの転換、繊維（衣）関連から、食、住まで分野を広げたこと、店内でのエスカレーターの設定や広い駐車場などの整備など、康治兄弟は日本社会の変容という時代の流れを「世の中のニーズ」⁴⁷⁾ととらえ、大胆にビジネスを展開していった。一方、康治は中国においても1980年代から浙江省の子供服の縫製工場をはじめ、大連や北京で縫製工場、桂林でホテル建設、ニコニコ堂百貨店経営など多額の投資を行った⁴⁸⁾。

1990年に瑞栄がニコニコ堂の社長に就任し、1994年に福岡証券取引所に上場した。しかし、

44) 林康治、前掲書、48頁。

45) 2019年8月22日に行われた林継発氏へのインタビューによる。

46) 『熊本日日新聞』、2015年10月29日付。

47) 1972年に建設されたテナントビルにパチンコ店も開業された。パチンコ店への展開は地元から反対され、不買運動も起こった（林康治、前掲書、56頁）が、林兄弟はこれを世の中のニーズにこたえた商売だと捉え、経営を続けた。

48) 林康治、前掲書、69-74頁。

1990年代以降、中国での投資による損失と大型スーパーの進出などによって、会社の業績は悪化し、2003年に民事再生法の適用を申請し会社が破産した。

Ⅲ-2-5. もう一つの「二世像」

康治の弟継発は1936年に生まれた。わずか6歳の差だが、人生経験が大きく異なっており、地方における福清出身者二世のもう一つの典型と言えよう⁴⁹⁾。

其湊の次男として生まれた継発は、小さい頃から兄、姉とともに家計を助けていたが、1955年に上京し、華僑二世の多くが学ぶ日本大学で4年間学んだ。この頃、福清出身華僑は経済力が向上し、子どもに高等教育を受けさせる余裕が出てきた⁵⁰⁾のである。入学すると、継発はすぐ陳学全（後に江洋龍などが受け継ぐ）が主導する同学会に入会した。東京には、汪兆銘南京政府時代に建てられた清華寮、後楽寮、青年会館と神田寮の四つの中国人留学生専用の寮があって、当時東京に学ぶ日本各地からの華僑出身者はそこに寄宿していた。継発も、世田谷にある青年会館の寮生となって、九州出身華僑が集まる「長崎軍団」に加わった。中国からの留学生同様、華僑出身の学生たちも、毎月神田にある同学会の事務所から3千円の生活費をもらい、そこから家賃500円を払って、残りを自由に使えた。ちなみに当時伊勢丹の社員給料が3800円の時代だったので、かなり高額の生活費であった。学費も、同学会が払ってくれた。

しかし、日本の会社は外国人を採用せず、当時、継発と一緒に学んだ華僑子弟は、卒業後、家業（中華料理店など）を継ぐか医者になるしか、選択肢はなかった。大学の先輩でもある同郷者が経営する店で食事したり、アルバイトをしたり、東京で勉学する間に、地方出身の二世たちのネットワークも広がり、卒業を控える継発も、同級生の薛一族が経営する陽華楼グループに就職することになっていた。しかし、父其湊と姉艶宋が共同出資して開いた中華料理店で働き手が足りず、継発は卒業後すぐ九州に戻り、店の調理場と出前を任された。

1960年夏、継発は熊本に戻り、ニコニコ堂を創業し、兄の康治とともにスーパーマーケットという新たな商売を始めた。創業当初は、継発が社長に就任したが、1962年に、兄の康治に社長の座を譲り、継発は専務になった。康治は商品の仕入れを、継発は同級生と一緒に店の人事・販売などを担当した。1967年に、熊本大学工学部を卒業した三弟の瑞栄も入社し、店舗のデザインや資材のディスカウントなどを担当した。同級生などあらゆる人脈⁵¹⁾を生かしつつ、兄弟たちはニコニコ堂の経営に専念した。

1975年頃、継発はニコニコ堂の専務を辞職し、ニコニコ堂の株を売却し、会員制の高級クラブ（800人の会員を有する）と100坪あるワンフロアのナイトレストランを開業した。日本の経済高度成長期で、当時では珍しい夕方6時から午前3時までの営業を始めたところ、大成功した。1980年に、米国旅行の際に訪れた自由の女神を見下ろせるイタリアン料理店からインスピレーションを得て、さらに熊本市中央区で熊本城を一望できる日本料理店「城見櫓」を開店し、年間9万人が訪れる人

49) 以下は2019年8月22日に行なわれた、林継発氏へのインタビューに基づいて整理した。

50) ただ、「女子無才便是徳」（女子は才のないことが即ち徳である）という男尊女卑の伝統的思想が戦後もしばらく華僑社会で続いており、女子を大学まで行かせる華僑の家庭はごくわずかだった。

51) 例えば、パチンコ店の経営に関しては、台湾出身の友人からアドバイスをもらい、日本が車社会になることを見込んで、店舗に十分な駐車スペースを備えておいた。

気店⁵²⁾となった。

Ⅲ-2-6. 良妻賢母の華僑女性像

林継発の妻、黄光子⁵³⁾は、1941年に大分県大野郡野津町に生まれた。父の黄儀修(1893年生)は福清鎮龍田(ぐうじえん)村で、母鄭氏は赤礁村の出身だった。父がいつ来日したか定かではないが、母が来日し、父と生活しはじめたのは1930年代後半である。父は大分県の田舎を回り反物の行商をしていた。頭がよく、字も読めていた。遅くとも終戦前に、自分の店まで構えていたが、戦後、米軍によってすべての商品が没収された。

戦後、父の体調は悪化し、1955年、62歳の若さで亡くなった。生計のため、母は養豚を始めた。雌豚のいる家に雄豚(種豚)を連れて行き、交配させた謝礼として、生まれた子豚を一頭もらってくる。子豚が育つと、一頭5千円ほどで売れた。光子は毎日、放課後まっすぐに帰宅し、容器をもって村の家々を回って残飯をもらってきては、豚の餌にした。そのため、光子は地元野津町の小中学校に9年間在籍したが、同級生と遊んだこともなく、自分のことを覚えている同級生はほとんどいないという。兄弟全員、中学校を卒業するとすぐ就職した。家には余裕がなかったのである。

光子は16歳に中学校を卒業し、母と同じ村の鄭氏が太分で経営する衣料品店に就職した。18歳の頃、親同士の紹介で林継発と見合いし、1962年に二人は結婚した。1963年に長男祥増が誕生した後、さらに4人の子どもが生まれた。その頃、新生のニコニコ堂が成長している時期で、お盆や歳末の忙しい時期に、光子も手伝いに行っていた。その間、祥増が4人の弟妹たちの面倒を見てくれた。

兄の修生は、中学卒業後、父と同じ龍田村出身の黄氏が太分市内で経営するタイコウというスーパーマーケットで働きはじめた。タイコウは1950年代に開業した衣料品から家具まで取り扱うスーパーマーケットで、当時太分の中国人のほとんどがそこに就職した。光子が結婚した後、修生は熊本に移りニコニコ堂で働くことになった。母鄭氏も、太分から熊本に移り一緒に暮らした。その時に、亡き父の骨を熊本にある墓地に移して埋葬した。

光子は、林家の5人男兄弟の2番目の嫁として、大家族の中での立ち位置や振る舞いにいつも気を遣っている。冠婚葬祭や大家族の行事を含めて、日々、娘として、嫁として、そして母としてすべきこととすべきではないことを意識し、また意識させられている。光子は、本人たちは自覚していないかもしれないが、父だけでなく、義父も夫も、その態度や言動に強い男尊女卑の思想が表れていると感じていたという。また、先祖供養を一つとってみても、日本と中国の両方の習慣に従って行う⁵⁴⁾ところがあって、その分多くの労力を要する。そういうこともあってか、同じ女性として、義姉艶宋たちの気遣いをありがたく感じているという。

其湊夫婦が他界した後、長崎稲佐山外国人墓地に林家の墓があることから、毎年継発と光子が子ども5人を連れて長崎の普度に参加している。旅日福建同郷懇親会への参加は、1974年に熊本華僑が主催したのが一回目で、以来、毎年参加するようにしている。大勢の福建同郷者が集まる懇親会の会場で漂う特殊な空気が、自分がやはり中国人だと感じさせてくれる。「最近になって、日本生まれだから、日本人と変わらないなんて言い方も耳にするようになったが、昔は中国人の家の子

52) 『日本新聞』、2016年9月16日付。

53) 以下の内容は5月14日に行われた黄光子氏へのインタビューに基づいて整理したものである。

54) 春秋のお彼岸、お盆と命日以外、中国の習慣で清明節にも供養を行う。

どもだからと、差別を受けていたものだ」。光子は、派手な社会進出がなかった分、特に中国国籍の不便を感じなかったという。祥増たち5人兄弟姉妹も、末娘だけが日本国籍に変更したが、ほかは中国国籍のままである。

2002年北京で行われた旅日福建同郷懇親会の大会を機に、光子は弟と一緒に、初めて父母のふるさとに行った。暮らしたことのない、すでに他界した父母の故郷、「ぐうじえん」（龍田）に足を踏み入れた瞬間、光子は思わず涙が出たという。また、北京で行われた福建同郷懇親会に継発夫婦は孫たちも連れて参加したことが、のちに彼らの中国留学、中国への関心の向上につながったことも、光子はうれしく思ったという。

Ⅲ-3. 華僑コミュニティと同郷者ネットワーク

Ⅲ-3-1. 各自の商圈とつながり

林継発によれば、戦前から、行商と中華料理に従事していた華僑たちは、各自に「商圈」をもっていた。上益城郡の御船には張氏、天草（二つの島）には林氏、葉（5～6人）氏と陳氏、人吉には王氏と翁氏、熊本には商氏という具合で、それぞれかなりの世帯があった。福清出身の華僑は主に中華料理と呉服の行商を生業としていたが、中華料理業に従事した5人⁵⁵⁾を除いて全員呉服商だった。ちなみに、阿蘇の近くには、山東省出身者も二世帯住んでいた。

福清出身の華僑たちは、商品の清算や同郷人の商売資金の調達（無尽講⁵⁶⁾）のために、熊本市内にある呉服問屋の隣で一戸建ての家を借りて、御船など周辺地域から華僑が10人程月に一回集まっていたという。商品の清算や無尽講がすんだら、サイコロや中国の花札など博打をしたり、アヘンの吸引もしていた。其湊も毎回行っていた。母から言われて、遅くなくても帰ろうとしない父を連れ戻すのが、継発の仕事だったという。月に一度集まって、無尽講という形の資金調達の傍ら、同郷・同業者間で様々な情報交換をしていたのは、とくに戦前の華僑コミュニティの主な特徴の一つである。

戦後の混乱期を経て、呉服行商に従事していた福清出身者は、林一族のように、衣料品店や中華料理店など多角的経営に転換していった。熊本市内に進出したものもいたが、戦前から居住する地域にとどまった人が多かった。長年の呉服行商で地元との間に築いた信頼関係とネットワークがあるからだと考えられる。表3は、1982年熊本県下の福建出身者凡そ60世帯の居住地域と職業の内訳を示すものであるが、約半数が熊本市内に集中しており、ほかは周辺の地域に分散居住していることがわかる。

1950年6月に朝鮮戦争が始まり、佐世保に米軍の海軍基地、福岡には板付の空軍基地がある関係で九州には多額の資金が投入され、熊本もこれまでにない活況に湧いていた時期であり、華僑たちの経済活動もこの機運に恵まれたのである。

55) 5人中の4人は会楽園（薛氏が1933年に創業）、中華園（趙氏が1933年に創業）、紅蘭亭（葉氏が1934年に創業）と新華楼（葉倫康氏が1956年に創業）の経営者で、一人は新華楼のコックをしていた。2019年8月22日に熊本で林継発氏に行われたインタビューに基づく。

56) 頼母子講とも。日本の銀行から融資を受けられない時代が長く続いた中、華僑の間によく見られた相互救済の金融組織である。「親」（世話人）の募集に応じて、講の成員となったものは一定の掛け金を持ち寄って、定期的に集会を催し、抽せんや入札などの方法で各回の掛け金の給付を受ける形がとられる。

Ⅲ-3-2. 熊本華僑總會

終戦後、華僑たちは自らの權益を守り、何より GHQ からの配給物資を受給するために、各地に華僑總會（華僑聯誼會）を立ち上げた。熊本華僑總會も、上林にあった旧憲兵隊の本部をそのまま事務所として発足した。1945 年 10 月からおよそ一年間、進駐軍による配給物資である食料や砂糖、缶詰なども華僑總會に運ばれ、熊本県下の華僑たちは月に一度、配給物資受領のために（配給物資を運ぶ手伝いをしてもらうために）子どもたちを連れて、華僑總會に集まっていた。

旧憲兵隊の本部は 3000 坪の敷地を有し、中には戦前、華僑がスパイとして逮捕され、収容され



写真 2. 終戦直後に発足した熊本華僑總會とその主要メンバー。（林康治氏ご提供）

表 3. 熊本県における福建系華僑の分布と職業（世帯）

	衣料品	飲食	行商 / 呉服	スーパー	自動車 学校	旅館	食品 / 商店	不明	計
熊本	3	11		10	1	1	1	6	33
人吉	1	3						1	5
牛深	1		2					4	7
本渡	3	1						2	6
水俣		1							1
八代		1	1					3	5
上益城			1						1
芦北								2	2
天草							2		2
合計	8	17	4	10	1	1	3	18	62

『旅日福建同郷懇親会二十年の歩み』（旅日福建同郷会編輯部編，1982 年）に基づき筆者作成。

た部屋もあった。戦後、華僑総会の事務所以外にも、憲兵が住んでいた平屋には、華僑、台湾出身者、引揚者など5家族ほど入居した。林継発一家も蔚山町から越してきて、のちに姉が上通で家を購入するまで、一年間ほど住んでいた。継発一家が離れたあと、ほかの華僑家族が入居したという。

熊本華僑総会は、進駐軍からの配給が終わると、事務所として利用していた平屋から退去した。3000坪ほどある土地は、のちに、入居していた五軒の華僑が買い上げ、分譲した。「華僑総会として、せめて事務所だった部屋とその土地を買っておけば、後の総会の財産となったのに」と、継発は残念そうに話した。華僑総会は、葉菊華を初代会長に、のちに林康治、継発、祥増と現在四代目を迎えている。総会は、1980年代半ば程から、毎年日本人団体観光客を対象とした、ハルビン、ウルムチ、海南、山東、上海などを10日間ほどかけて巡るツアーを企画し、そこで得た収入を運営資金にしている。

Ⅲ-3-3. 「新華僑」の台湾出身者

終戦直後の日本には、90,419人の中国人がおり、そのうち、大陸出身者は56,051人で、台湾出身者は34,368人であった⁵⁷⁾。熊本県には、少数ではあるが台湾出身者もいた。彼らは終戦まで日本の統制管轄下にあった「日本国民」であったため、戦後、大陸出身者のように「連合国民」としてすぐに特配を得られなかった⁵⁸⁾。しかし台湾出身者は、日本語が堪能で頭がよかったため、特に困窮者はいなかったという。当時、台湾出身の学生が10人程共同で熊本でラムネやラーメンなどを売り出して、かなりの儲けがあった。現在、中国や東南アジアにも進出している味千ラーメンの創業者劉壇祥も、終戦当時熊本大学工学部の台湾出身の学生であった。終戦後、劉一家も旧憲兵隊の平屋に入居してきて、本格的にラーメンを作り始めた。また、日本の兵士として戦前台湾にいたが、戦後熊本にきた黄氏も、人吉でお菓子メーカーを営んだのちキャバレーなど多角的経営に乗り出し、成功した。黄一族は今では東京で香妃園（1963年創業）という中華料理店を経営している。台湾出身者は経済的に安定し、生活基盤が出来た後、台湾から多くの親戚を呼び寄せた。

戦前から、熊本の福清出身者と台湾出身者は日ごろ仲よく付き合いをしていた。戦後、台湾出身者が中華民国の国籍を回復すると、熊本華僑総会に入会して、当時「新華僑」と呼ばれていた。1949年、中華人民共和国が成立すると、華僑総会は大陸支持を表明しつつ、国民党とのつながりを維持していた。菊華は台湾に招かれたこともあったという。東京で学んでいた際に学生運動に参加した継発は、地元熊本に戻ったあと、社会主義中国に関する情報をほかの華僑に広めたりした⁵⁹⁾。華僑の間には、表立ったイデオロギーの対立も闘争もなく華僑コミュニティが再編されたように思われたが、1972年日中国交回復後、台湾出身者のほとんどが日本国籍を取得し、以来、華

57) 許淑真「新華僑の生成と日本華僑社会の変容」『摂南学術』シリーズB第5号、1987年、30頁。

58) GHQは1945年10月31日付の覚書によって、中国大陸出身者は連合国民として定義されたが、台湾出身者の身分はいまもなまだった。戦後の生活難のなか、台湾出身者の法的地位のいかに当事者の生死にかかわるので、中華民国行政院は、1946年1月12日に、さかのぼって1945年10月25日をもって台湾省出身者の中国国籍を回復すると決定するなど、連合国民としての処遇が得られるよう図ってきた。実際に日の台湾出身者は、連合国民としての処遇を得られたのは、47年2月25日、GHQから日本政府に覚書が出されてからであり、また彼らの中国国籍を回復したのは1952年4月サンフランシスコ講和条約発効の日からである（許淑真「第二次世界大戦後日本からの引き揚げについて—台湾出身者を中心に」、『摂大人文学』第三号、1996年、33頁）。

59) 同級生である楊忠銀氏とそれぞれ地元で活動を続けていた。2021年2月3日、楊忠銀氏への電話インタビューによる。

僑総会からおのずと離れていった。熊本華僑総会は殆ど福清出身者が占める状態が中国大陆から新たな移民が増えはじめる 1990 年代まで続いた。

Ⅲ-4. 熊本県の華僑の今後

Ⅲ-4-1. 老華僑となる「新世代」

2000 年あたりから熊本県にも、少数でありながら、中国大陆の各地から国際結婚や研修生などの名目で「新華僑」が流入してきた。それぞれ華僑総会の会長と副会長である林祥増と鄭則賢は、自分の商売の傍ら、華僑総会の業務をこなしているが、新華僑とのかかわりの中で、より「老華僑」としての自分たちの違いを意識するようになったという。世代交替する中、熊本の華僑コミュニティは今後どのような変化を見せるのであろう。まず、老華僑の中でも比較的新しい世代である林祥増⁶⁰⁾、副会長鄭則賢⁶¹⁾について触れておこう。

5 人兄弟の長男として、1963 年に生まれた祥増は、地元の小学校に通ったあと、熊本の中高一貫制の九州学院に進学した。父継発が熊本で飲食店を経営し始めたあと、20 代の祥増が飲食店の責任者を任されたが、経験不足を痛感し、2、3 年後に、当時ニコニコ堂の子会社であった東京品川にあるジョースマイルという焼き肉屋で働き始めた。3 年ほどして、福岡や鳥栖などにあるニコニコ堂の関連会社での勤務と、紅蘭亭グループでの勤務を経て、2002 年に、父から城見櫓の経営を引き継いだ。

熊本城を一望できるのを売りに商売を続けてきた城見櫓は、平成 28 年（2016 年）熊本地震によって、店舗ビルと道路の間に亀裂が生じ、調理場のガスも寸断した。70 人の従業員を抱え、経営の見通しが立たないなか、継発は店の廃業を決めたが、それに納得しない祥増は父を説得し、10 名のスタッフと新会社を立ち上げ、営業の再開に取り掛かった。一方、5 月下旬から 6 階建てビルの最上階の貴賓室（迎賓庵）を無料開放し、復興のシンボルになった熊本城の修復作業を間近で多くの人に見てもらうことで、「恩返し」することにした。更に、その年の 7 月下旬から部分的に営業を再開し、その売り上げの一部を熊本城災害復旧支援金に寄付する活動を始めた。店も、2017 年一年間の来店客数は 5 万 500 人と震災前の 7 割弱にまで回復し、従業員も 50 人に増えた⁶²⁾。

一方、副会長の鄭則賢は、一世である父文忠と二世である母林艶宋の長男として、1960 年に長崎に生まれた。祥増と従兄弟関係にある。文忠は、長崎の劉家に嫁いだ姉の呼び寄せで 1945 に来日した。原爆を落とされた直後の長崎に上陸し、駅前を通った時には、たくさんの死体が横たわっていたのを目撃したという。文忠は、同郷者が経営する四海楼で皿洗いなど数年の修行を積んだのち、長崎でちゃんぽんの店を開いた。林其湊の長女艶宋と結婚し、ニコニコ堂創業の際に出資し、副社長となったのを機に、一家は熊本に引っ越した。則賢は、1972 年、地元の日本の小学校を卒業したのち、母の勧めで横浜山手中華学校の中学部に入学した。そこで、則賢は地方から来た大勢の華僑子弟と一緒に寮生活をしながら民族教育を受けた。1970 年代は、「二つの中国」の政権の正

60) 林祥増氏は、現在城見櫓の経営の傍ら、熊本華僑総会の会長も務めている。2019 年 2 月 16-18 日に九州で行われたフィールドワークにおいて、熊本、長崎在住の複数の華僑への訪問や関連施設の見学などの案内の傍らインタビューにも応じていただき、2019 年 5 月 12-14 日に北九州市で行われた旅日福建同郷懇親会でご家族（父継発、母黄光子、妻、長男（1992 年生）、次女（1996 年生））をはじめ親類の方と懇談する場も設けてくださった。

61) 鄭則賢氏へのインタビューは、北九州市で開催された旅日福建同郷会期間中の 2019 年 5 月 13 日に行われたものである。

62) 『熊本日日新聞』、2018 年 1 月 25 日付。

統性を巡り横浜の華僑社会では、激しいイデオロギーの対立が続いた時期であり、則賢は同胞であるはずの華僑の闘争を目の当たりにしてショックを受けたという。

山手中華学校の中学部を卒業した則賢は、1976年頃熊本に戻り、日本の高校に進学した。卒業後、父の知人の紹介で、日中国交回復後に中国政府が東京で設立した華美貿易会社に就職した。則賢は仕事の関係で中国に行く機会にも恵まれ、1982年ごろ、九州在住の多くの同郷者とともに、初めて福清の故郷を訪れた。父の兄弟とその家族の、自分と限りなく似ている顔を見て、則賢は感動の涙を流した。則賢は、日本から持っていった大量の古着を親類に配った。初めての帰郷は、則賢に深い印象を与えた。則賢は、中国国籍にこだわりながらも、自分の故郷は生まれ育った長崎であり、福清は第二の故郷となると語った。

祥増と則賢は、二人とも1960年代生まれで、親世代が居住地における生活基盤も、経済活動も安定していた時期に成人していった。受けた教育などの経歴はやや異なるものの、親世代が紡いだ同郷ネットワークを多用してきたことは共通している。父祖のふるさとをルーツに思いつつ、生まれ故郷である日本（熊本など）に根差したエスニック集団としての華僑意識を持っている。一方、親世代よりも、中国（故郷）を訪れ、新しい中国人に接することも多くなった分、「老華僑」を持つ「日本的」一面を自覚しているように思われる。

Ⅲ-4-2. 新華僑、そして新たなつながり

福建系華僑の強い血縁、地縁紐帯およびその中核である故郷（僑郷）の存在が、新たなつながりを作り出している。多くの福建系新華僑の来日である。福建系新老華僑の融合について別稿⁽⁶³⁾で論じたので、ここでは、林一族の故郷である赤礁村より来日した新華僑林友健の経験から老華僑と故郷とのつながりを見てみよう⁽⁶⁴⁾。

林友健は、1972年に福建省福清県赤礁村に生まれ、1990年代後半に来日し、日本語学校などで学んだ後、埼玉のちに東京で中華料理を経営している。友健の曾祖父である林其阜は、前出林其湊の三兄で、8人兄弟（6男2女）の中で一番早く来日した。鳥取県周辺で行商をし、安定したのちに兄弟たちを日本に呼び寄せた。1921年に、長男（友健の祖父）が鳥取県で生まれた。しかし、3年後にまだ三十代の其阜が病死し、妻（友健の曾祖母）は幼い子を連れて再婚した。九一八事件後、其湊以外の兄弟は家族を連れて帰国したが、1937年ごろ、16歳になった友健の祖父も、赤礁村に帰って「認祖」し、そこで暮らすことになった。帰国後の祖父は、牡蠣を売ったり、農作業をして生計を立てていた。1930年代当時は、海賊、山賊が横行し、祖父の売り物どころか時々着る服まで奪われて帰ってくることもあった。のちに、祖父は結婚し、息子二人をもうけた。友健の父はその次男である。祖父は2002年に81歳で亡くなり、父も十数年前に亡くなった。現在、一人息子である友健は日本で家族を作り、定住しているが、母は一人で赤礁村で暮らしている。

其湊は改革開放後度々故郷に戻って、兄弟たちの家族を訪ねていた。友健の祖父のことを特に気にかけていた。友健の祖父はすべてのいとこ（其湊とその兄弟の子ども）の中で比較的に年長であることも原因であろうが、16歳まで日本で暮らしていたこと、祖父の父である其阜と其湊は特に

63) 張玉玲、2015年、前掲論文。

64) 以下の内容は、2019年夏に行われた赤礁村での調査と、林友健氏へのインタビュー（2019年6月22日の電話インタビューと10月30日に東京で行われたもの）に基づいている。赤礁村での調査についても、林友健氏からご協力いただいた。

仲が良かったからかもしれない。故郷では、其湊は「兄弟思い」そして「故郷思い」が強い人だと評判である。

其湊が亡くなった後、康治が引き続き故郷とのつながりを保っていた。林氏祠堂は、新中国成立後に一度小学校として使われていたが、のちにまた祠堂として復活し、再建される際に、康治は多額の寄付をした。1980年代、康治が保証人となり、友健の父は日本に留学していた。留学中の日本と日本人への印象がとてもよかったらしく、帰国後の父は、友健にも日本への留学を薦めた。

友健一家からすれば、3代以上離れた康治はすでに遠い親戚となり、義務も義理も果たさなくてよい関係になる。したがって、友健は、其湊と康治の故郷に対する行為も其湊同様、「十分惦念家郷」（故郷思い）だと語り、「其湊の親としてのしつけがよかったからだ」と繰り返し強調していた。一方、友健は、林姓の血縁に基づく連帯感を重視している。2000年頃、赤礁村の林一族の族譜の編纂の時に、族譜にある其阜・其湊兄弟の世代から始まる一族の関係が示される部分を冊子に作って、康治兄弟にも渡している。また、其湊の六弟の長男である「中瑞」が西葉村の葉氏に「入贅」⁶⁵⁾した。中瑞は同輩（同世代）の兄弟やいとこの中で五番目の男子なので、友健は彼を「五叔公」（祖父）と呼んでいる。葉家の人間になっても、友健は彼を「林家の一員だと思っている」⁶⁶⁾という。

居住地に根を下ろし、父祖の故郷への愛着も希薄化したように思われる新世代の老華僑たちと、中国で生まれ育った新華僑は、価値観や行動様式において明らかな違いが存在しており、どこか「隔たり」さえ存在している両者である。「血のつながり」を持つ「一族」としての「我々意識」と、「ルール」である故郷への共通志向のもと、神戸や横浜などでは新老華僑が歩み寄り始めているが、地方に居住する華僑の動向にも引き続き注目すべきであろう。

IV. 地方における華僑の生活世界

1899年内地雑居令の発布によって、行商人として来日の門戸が開いた福清出身華僑の多くは、終戦後職業が多角化するまでの長い間、呉服行商を唯一の生業としており、許可なくほかの労働に転じることも禁じられていた。日本の外国人労働者の受け入れ制度と中国人の海外移住における血縁、地縁紐帯が果たした重要な機能が相まって、在日華僑社会の中でも一見特殊なサブ集団として福建出身者のコミュニティが形成されたのである。こうした福建系華僑による呉服行商の実態について、未だに解明されていないところが多く、以下では、本稿で取り上げた事例に他地域で行われてきた調査も加えながら基礎的な分析を試みる。

IV-1. 呉服の流通における仲介機能と地域社会への接近・融合

同郷、同族のついでで来日した福建系華僑は、最初のうちは、先輩華僑から商品を借りて売り歩くが、日本語や商売の基本を身に着けて、売り上げも増えていくと、故郷から同郷・同族を日本に連れてきて自分が商品を貸す側になる。光子の父親のように自分の店を構え、日本の問屋から仕入れた商品をさらに同郷人に売る、または貸す人も少なくはなかった。このように、戦前日本の呉服の流通において、特に農村地区における農民の消費者と呉服問屋の間には、福建出身の行商人が重要

65) 婿入り、夫が妻の実家の姓を名乗り、その一員になるという婚姻形態である。

66) 同上。

な仲介機能を果たしていたことが窺える。彼らはこの過程において、消費者である農民や地元の日本の問屋との間で、複数回にわたる商品や金銭のやり取りなどを通して、深い信頼関係を築きあげた。これが戦後になって華僑が多角的な経営を展開していく際の基盤となったことは、熊本の林氏の事例からも確認された。終戦後、多くの華僑が元の居住地にとどまったのは、商売（生業）に必要な、地元の確固たる信頼と支持がそこにできたことが大きいと考えられる。

ちなみに、戦後、既製品の洋服の普及に従って、昭和30年代を境に減少していった。九州地域の華僑には、スーパーマーケットの経営に転じた人が多いが、その他の地域では、毛糸、ふとん、洋服などの繊維製品を扱う衣料品店、洋品店に姿を変えて生き残ったものが多い。

IV-2. 戦前と戦後の中華料理店

明治初期に長崎に渡り、貿易などで成功した同郷者を頼りに来日した福清出身華僑は、行商などの雑業を経て、充足な資金が貯まると地方都市の中心部で中華料理店を営む、という一つの典型が、本稿で取り上げた福岡の張一族、熊本の葉一族の事例から窺えた。これはほかの地方都市でも同様な状況が見出せると考えられる。しかし、日本における中華料理の受容過程を考えれば、華僑が経営する中華料理店を戦前と戦後に分けて考える必要があるだろう。

明治維新後の日本は、欧化志向が強く、洋食を食べるのが「文化生活」⁶⁷⁾ だと考えられていた。そのような中、中華料理店「偕楽園」は、「新奇を好」み、「西洋料理にも最う飽きた」「朝野の金満家」（朝廷と民間の金持ち）によって1883年に東京で設立され⁶⁸⁾、成功した。のちに、偕楽園を見本に、中華料理店が東京を中心に全国的に増えていった。しかし、鱈のひれやツバメの巣などの高級食材を多用する福新楼や紅蘭亭の初期のメニューからわかるように、戦前の中華料理店のほとんどは、都市部の学生や公務員、文人などいわゆる有閑階層が利用するものであり、一般庶民向けではなかった。そのため、都市の規模に見合う店舗数以上の中華料理店の展開は見られず、先來者でかつ充足な資金を持った華僑のみがその経営に携わることができたと考えられる。

戦後の混乱期、林康治のように、戦勝国民としての「特権」を活かし、闇市での商売も含めた地域間貿易（「運び屋」）のほか、特配や農村から集めた野菜などの食材を使った、お手頃価格でボリュームもある中華料理店が一気に増えた。これらの中華料理店は、戦前的高级志向の料理店と違い、一般大衆向けの食堂がほとんどであった。これがのちに全国的に普及した「町中華」と言われる中華料理の出発点となった。

IV-3. 共通記憶としての戦時中の体験

戦前、地方に分散居住していたこともあり、福清出身華僑が日ごろ接触していたのはほとんど日本人であった。日清戦争のあと、中国人を蔑視する風潮が高まる中、地方で暮らす華僑は日ごろから「中国人」として強く意識させられていた。これは、特に日中戦争の間「敵国人」として差別・警戒され、時にはスパイとして連行され拷問されることも多発する中で、華僑たちは一層自らの民族的アイデンティティを、国民国家である「日本」の対極に位置付けるようになった。

戦時中に家族とともに経験した共通の記憶を基に、戦後、その上位概念である中国人意識に内包された形で、強まった「福建人」意識が全国的同郷組織の成立によって可視化された。1961年に、

67) 田中静一『一衣帯水 中国料理伝来史』柴田書店、1987年、185頁。

68) 『読売新聞』、明治16年（1883年）10月31日付。

全国に分散居住する同郷の連携を促進し、会員のビジネス、結婚、民族教育、文化継承の問題を解決するための「旅日福建同郷懇親会」の設立である。この中で、特に日本に生まれた二世の福清出身者は、活発な活動を行ってきた⁶⁹⁾。勉学や華僑総会の活動などを通じて、二世たちは、東京や神戸など他地域に居住する広東、上海などの出身地の華僑とも接する機会が増え、華僑というカテゴリーの中での福清出身者の特異性を意識する（させられる）ようになったのも同郷活動の展開につながったのだと考えられる。

V. 結びにかえて一地方史としての華僑研究の可能性

明治維新後の日本政府による一連の政策や日中関係ないし国際情勢が影響する中での華僑経済、文化継承およびコミュニティの変容などについては、これまでに多くの研究成果が蓄積されてきた。本稿では、①19世紀末以来、福建系華僑が日本に移住し、呉服行商や中華料理に従事ようになったのも、日本の労働法と対華政策の産物の一つであること、②戦時中の華僑の境遇も日中戦争から直接影響を受けたものであること、さらに③日本の敗戦や1949年の中華人民共和国の成立とそれをめぐる国際情勢の変化が、華僑のナショナリズムの高揚をもたらしたことは、今回の熊本における福建系華僑の暮らしを通してよりミクロな視点から確認できた。在日中国人を一つの「集団」として見た時には、彼らは明治維新とともに成立し、成熟していく国民国家としての近代日本にとって、統合すべき「国民」の枠外にある「よそ者」であり、祖国「中国」の紆余曲折な近代史にも翻弄されてきた存在なのである。

しかし一方、本稿で取り上げた華僑の家族誌からわかるように、華僑をある「時」とある「場所」で暮らす一生活者として見た場合、日本社会の発展・変容とともに歩んできたもう一つの華僑史が浮かびあがってくる。それはつまり、日本近代史、地方史の一部を成す華僑の歴史なのである。

都市部に居住する一部の人はいえ、明治以降徐々に受容されていった中華料理の地方での普及に福建系華僑が大きくかかわっていたことは、前述した福岡の張一族と熊本の葉一族の事例から十分窺えた。また、呉服行商人たちは、結婚式などの晴れ着も普段着も手作りの和服中心の戦前においては、交通の便が悪い農山村や漁村に居住する人々を対象に反物を売り、戦後、洋服が普及していくと、洋装・洋品などの既製品を扱うようになり、販売方式もセルフサービスを導入するなど、時代の流れに順応していったことは熊本の林一族の事例から明らかである。華僑が生きるすべとしての職業の変化は、日本社会の変容そのものであり、華僑という存在をその生活の場である日本社会という枠組みの中でとらえなおす必要を示唆したものと言えよう。一方、明治以降、「脱亜入欧」をスローガンに進められた日本の工業化・近代化は、東京などの都市部に重点が置かれていたこともあり、近代化の成否も、こうした大都会に焦点を当てられ、議論されてきたが、本稿は、日本人の半分以上を占めた農村部の人々の暮らしが江戸時代の延長にあったところから、徐々に都市化していったという社会的変容を、そこに居を構えた華僑の生業と暮らしを通して、浮き彫りにすることができた。

戦前および終戦後しばらくの間までは、国民国家としての「日本」と「日本人」という国民意識が醸成する重要な時期であり、この歴史を、「異民族」として語られてきた華僑たちが実際の生活

69) 張玉玲、2014年、前掲論文。

者として「その時」「その場」にいたという史実と、どのように関連付けながら捉えるか、本稿の考察を通して少しばかり手がかりを得ることができた。今後、ほかの地方における華僑についても緻密な調査を重ね、体系的な民族誌研究が課題として残されている。

謝辞

本稿は、主に 2019 年 2 月～8 月にかけて、福岡の張一族、熊本の葉、林の二家族を中心に行ってきた一連のフィールドワークに基づいたものである。多大なご協力をいただいた林家の関係者(林康治氏、林継発氏、黄光子氏、林祥増氏及びご家族の皆さま、林友健氏及びご家族の皆様)、葉家の関係者(葉山祥泰氏、葉山真由美氏、葉山祥鼎氏、葉山祥明氏、堀内重見氏)、張光陽氏に御礼申し上げます。

また、2019 年 2 月 23 日に南山大学で行われた中部人類学談話会第 247 回例会において、「日本における福建出身華人の移住・定住戦略-家族誌のアプローチから」を報告させていただいた。コメンテーターの沼崎一郎先生(東北大学)をはじめ参加者の諸先生から大変有益なコメントをいただいた。この場を借りて感謝申し上げます。

なお、本研究は JSPS 科研費 19K01212(代表者 張玉玲)の助成を受けたものである。